

私立大阪盲啞院が松下幸之助に与えた影響

——社会起業家・古河太四郎の教育観を中心に

渡邊祐介

序——注目すべきレファレント・グループとの関わり

前号では、松下幸之助の人格形成にも大きな影響を与えたと思われる五代五兵衛の人生と、その最大の業績でもある私立大阪盲啞院について紹介した。本稿は、私立大阪盲啞院をめぐる群像が、そのまま奉公時代の松下幸之助（以下、幸之助）のレファレント・パーソン（企業家、有識者の人生行路の転機に際して、進むべき道を教示し、また実際に援助・斡旋を行うような、当人にとって非常に重要な働きをした人物¹）のグループになっているのではないかという見地に立つて、さらに検討を進めたい。

私立大阪盲啞院をめぐる群像とは具体的にいえば、五代五兵衛、五兵衛の弟の五代音吉、幸之助の父政楠、そして五兵衛と並ぶ社会起業家古河太四郎の四人である。五兵衛は前号で述べたとおり、若年時の病で全盲になったものの、按摩業から周旋業に転じ、一代で資産を築いた後、社会福祉のために私財を擲^{なげ}って大阪盲啞院を開いた立志伝中の人物である。五兵衛の弟の音吉は、盲啞院の共同設立者であり、自

らの事業としては兄の経済的援助のもと、五代自転車商会を開業している。奉公人の幸之助にとっては直近の店主であり、最重要のレファレント・パーソンといってよい。

父政楠は和歌山で米相場に失敗して家財を失い、一人大阪に出てきてこの盲啞院に職を得た。政楠にとって五兵衛は救世主であったことは間違いない。政楠の失敗により幸之助も小学校中退を余儀なくされ、奉公生活に入ったわけだが、この時、彼が大阪で生活の安定を得たことと幸之助を奉公させる決断をしたことは、幸之助の人生を決定づける大きな要素であった。

古河太四郎は五兵衛が設立した大阪盲啞院の院長を務めた人物で、わが国近代盲聾教育の創始者という社会起業家である。ただ、これまで幸之助の諸伝記中にも、また幸之助本人の証言からも語られたことはない。しかし少なくとも、顔や名前は知悉^{ちしつ}していたはずであり、政楠の死との関わりからも幸之助とまったく無縁の人物とは考えられない。本稿では前号の五代五兵衛に続き、レファレント・パーソンの一人として古河太四郎（以下、太四郎）の事績の紹介と幸之助への影響を検討の中心に据えながら、幸之助の個人史における私



古河太四郎の肖像 『古川氏盲啞教育法』より

立大阪盲啞院の影響を考えたい。

とくにレファレント・パーソンとしての太四郎の重要性は、幸之助の人間観との関わりにある。幸之助哲学の根幹にある彼の人間観は宇宙と世界における人間中心説「人間は万物の王者である」というものである。この幸之助の人間観が一体いつ誰の影響を受けて成立したかという点については、重要な議論の割には論じる題材が少ない。

この点、太四郎のキャリアと業績は注目に値する。太四郎は漢学に精通する環境に育ちつつ、さらに維新後の学制成立に伴う教員養成課程において西洋の教育思想を学び、少年期の幸之助の周辺で最も東洋西洋の知識教養に通じた人物であった。²⁾ 太四郎との接触で幸之助がその薫陶を受け、自らの人間観形成に何らかの影響を受けたという可能性が、太四郎の人間像の中に発見できるかもしれない。というのは、

五代五兵衛と違い太四郎は健常者であり、青年期まで障害者と関わる環境にはなかった。その太四郎が奇縁を得てあえて障害児教育を始めたのは、生来の博愛心の強い人格にもよろうが、学問的履歴から培われた人間観がそれなりに存在したと思われるからである。

そうした太四郎が幸之助に影響を与えうる機会が本当にあったのかどうか。その点を焦点としつつ、本稿では幸之助の奉公人時代において私立大阪盲啞院がどういう場所であったのかを検証してみたい。

なお、太四郎については公刊されている資料は少ない。重要資料は、岡本稱丸^{いんまわら}『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』(日本放送出版協会、一九九七年)である。太四郎の子孫古川統一^{こういつ}による『累代の人々——盲聾教育の祖・古河太四郎亮泰の系譜』(鳥影社、一九九九年)は小説の形をとっており、古河の前半生しか描いていない。したがって、岡本による七〇〇頁を超える労作で近代盲聾教育についての学術性も高い『近代盲聾教育の成立と発展』を中心に、とくに幸之助と関わる範囲で、太四郎の業績をふり返ることにする。

I 大阪盲啞院に至るまでの古河太四郎

政楠の死と幸之助との接点

太四郎と幸之助との接点は、確実なところでは明治三十八(一九〇五年)二月に、当時大阪市東区船場堺筋淡路町^{せんばさかいすじあわじ}にあった五代音吉が営む五代自転車商会に奉公を始めた頃だと考えられる。音吉の兄五兵

衛が創設した大阪盲啞院はすでに開院しており、幸之助の父政楠はその盲啞院に三年前から勤務していた。前号で明らかにしたように大阪盲啞院の設立にあたっては、音吉も共同設立者として深く関わっており、兄弟の交流は頻繁であった。

幸之助が店を訪れた五兵衛の見送りのために、五兵衛の自宅もしくは盲啞院へ通った可能性はきわめて高かったはずである。そうした環境で、五兵衛や政楠とともに開学当初から院長として盲啞教育の先頭に立っていた太四郎の存在を、まったく意識しなかったとはむしろ考えにくい。直接的な接触の程度を示す資料は存在しないが、幸之助が奉公して一年を経過した明治三十九（一九〇六）年の私立大阪盲啞院の状況を整理して、当時を推察してみる。

この年は、大阪盲啞院が創設されて六年目にあたるが、当時の経営はまさに危機的状況にあった。生徒数が一六六名と最大となったものの予算は前年度より二〇〇〇円も増加し七九二〇円を要した。これに対し、収入は微増したものの、六四二円の赤字を見ており、院主である五兵衛は相当の私財を投じてその補填を行なった。日露戦争による経済の停滞が最大の要因であったが、二回目の卒業生を送り出すに至った教育課程の充実とは裏腹に、財政面においては私立による経営は早くも限界に達しようとしていたのである。この経営危機に五代五兵衛、松下政楠、古河太四郎は窮余の策として盲啞院の市立移管に奔走していた。

日常の財政的運営については五兵衛が秘書兼書記兼会計の政楠の手を借りて執り行っていたが、陳情が伴ってくると、漢学の教養に秀

でた太四郎の主導が不可欠であったと太四郎研究の第一人者・岡本稲丸は、五兵衛署名の「私立大阪盲啞院公立御引継至急懇願書」が太四郎の筆跡であることもふまえて説いている。この陳情内容は切実なもので、院の設立からその発展、経過を報告し、その後、「近頃二到り我身躰ニ非常ノ衰弱ヲ来タシ起臥日ヲ同フスルガ如シ。茲ニ於テ思惟ラク折角今日ニ持續シ、万一中途ノ廢ヲ取ルガ如キニ到ルアラバ、啻ニ特典ノ御補助ヲ蒙リシ恩恵ヲ空クシ各方慈家ニ対スルノ義務相立タザルノミナラズ盲啞生徒ノ困惑言ヲ俟タザルニアルナリ」と五兵衛は自らの体調まで引き合いに出している。

この時期、五兵衛の弟音吉は五代自転車商會が盛業で忙しく、盲啞院の舎長さえ兼ねていた政楠は、困難な寄付金や義捐金の収集に暇がなかった。この五兵衛の嘆願によって九月には、大阪市政の執行機関である大阪市参事會はこの件を議論し、市長の諾意を得るに至るが、「松下と古川は、(中略)市立移管の急進展にともなう大量の資料作成事務や交渉の急増に、たちまち過重な負担に直面」、そしてその過勞がたつた政楠は九月二十九日に急逝するのである。

政楠の死は五兵衛と太四郎に大きな衝撃を与えた。折しも太四郎は第一回全国聾啞教育大会に出席のため上京中で、二十二日間も大阪を不在にしていた。太四郎の日記によれば、そもそも出発の日九月二十六日は午後六時の梅田停車場に盲啞院の教頭とともに政楠自身が太四郎の見送りの一行の中にいた。ところが二十八日に政楠の異変が伝えられ、二十九日に死去、太四郎は十月一日に政楠の死を知ったらしい。岡本は政楠の死因を脳卒中か心臓病ではないかと推察している。

こうした事実をふまえれば、政楠の葬式に太四郎がいた可能性はないが、それゆえに帰阪後、太四郎が遺子幸之助に何ら悔やみの言葉をかけなかったはずはなかったのではないか。

太四郎の出自

ここで先に紹介した岡本稲丸による実質的な太四郎の伝記『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』を資料として、太四郎の生涯をふり返っておこう。

太四郎は、弘化二（一八四五）年に京都は上京かみぎょうにあつた家塾「白景堂」において、父直次郎、母あいの四男として誕生している。父直次郎は光格上皇に出入りを許された名士で、太四郎自身の言によれば、「文武両道二達シ、夙ニ白景堂ナル家塾ヲ開キ、朝二孔孟ノ道ヲ説キ、夕ニ柳生流ノ武ヲ講ジ、諸生ヲ教フル事三千余人、名声四方ニ聞ユ」という人物であつた。京都市中で寺子屋が隆盛を見た頃であり、直次郎は官廷にも町人にも信頼が篤かつたという。太四郎は明朗闊達な少年時代を送つたが、剛毅な父直次郎は九歳の折に亡くなり、その後は祖父と長兄の庇護のもとに成長した。

太四郎は十二歳に寺子屋での修養を終えると、そのまま白景堂の教師となり、同時に三十歳を迎えるまで、多くの師を得て学問修業に励んだ。また三味線、浄瑠璃、俳諧、和歌に加え、筆に陶芸といった芸事にも通じていた。武芸諸般についても、十三、四歳時に安政の大獄で揺れている世相を尻目に、剣術柔術に精を出し、軍学まで修めている。

太四郎の師は父の機縁から、非常に多岐に及び枚挙に暇がない。こ

とに上田元冲の古義学（後世の解釈によらず、論語などの経典を直接実証的に研究する原典主義）や、神道家野々口隆正の国学と音韻学（歴史的な中国語および漢字音の音韻変化を研究する学問分野）はのちの盲聾教育の開發に有効であつたと、岡本は説いている。¹³

幕末の京都にあり、豊富な人脈の影響もあつて、太四郎は稼業の教師を辞し、国事に奔走したという。勤王の具体的活動については不明なことが多い。

維新後の転身と事件

太四郎の勤王活動は維新前に収束を見ており、維新成立の時点では以前のように白景堂の教師に戻っている。ここで注目すべきことは、塾といつてもその規模は実は私塾の域を越えるほど大きな規模を持っていたことである。明治二（一八六九）年九月に京都府に提出した報告書によると、当時の白景堂は、太四郎の兄亮朝あけともを塾主として、男子三二六名、女子二一八名、夜学生五九名で、さらに種々の通学者を入れると七〇〇名に近い大所帯であつた。

京都府政は首都機能が東京に移転したこともあり、文化・教育面での時代の先鞭をつけようとしていた。日本最初の小学校も京都で開校された。白景堂も新制の小学校の開校を見て塾を閉じたという。¹⁴ こうした教育行政の影響を受け、この年太四郎は師の一人で、かつて支那学を学んだ吉田秀毅が京都府学務課長となつていた奇縁もあつて、吉田から待賢小学校ほか二校の教員を要請されたのである。太四郎は正式名称でいうと上京第十七番組（待賢校）、また第十八番組、第十九番

組小学校の筆道師を命じられた。私塾教師から新制度化の公立小学校教師という転身は、激動期にあつて恵まれたものといつてよいであらう。しかし、一つの事件が太四郎の後半生を大きく変えることになる。

明治三（一八七〇）年八月、太四郎のもとに申渡状が届く。それは太四郎が筆道師を命じられたのち、禁止されていた帯刀をしていた不届きと、教師の身にありながら、水不足の農民を助けるために鷹ヶ峰山中の釈迦谷に新池をつくる大工事を企図し、知事の許可書を偽造したという咎である。

太四郎と縁を持ち、唯一太四郎自身から盲聾教育の起源を聞き書きした東京盲聾学校長小西信八の「直話」によると、太四郎は「維新の当時、京都に在て岩倉、三条両公と共に寢食を忘れて国事に奔走し、俱に謀りしことが図らずも国禁に触れ」たと記し、本来は岩倉具視、三条実美といった大物にも累が及ぶ不正を一身に受けて罪に服したという。かくて、太四郎は明治五（一八七二）年八月に至るまで、二十五歳から二十七歳までの丸二年間を獄中で過ごすことになる。

盲聾教育への取り組み

しかし太四郎が盲聾教育と関わるのは、この入獄がきっかけであった。太四郎は六角牢獄を経て千本牢獄につながれたと推測されており、いずれにしても太四郎の自宅や旧白景堂に近いいわば生活圏であった。そのため苦役に出れば行き交う人々は顔見知りで、教えるも頻繁に太四郎のいる獄窓の下にまで来ていたという。教師の身分は武士待遇であり、また平素、太四郎の人物像を知り、政治犯的情状を周囲に

認知されていたことから、番人も厳格な隔離をしていなかったようである。

その獄窓から外を眺める太四郎の眼にある光景が飛び込んできた。それは西堀川通に住む聾啞児たちで、日毎彼らが遊んでいると他の子どもたちからひどい虐めを受けていたのであった。この時の太四郎の感慨を、小西の「直話」は次のように記録している。

最前から此の有様を見て、一種靈妙の氣に迫られ、斉しく人の子と生れながら唯だ物言ふ事の能はぬ為めに斯くも他より蔑まれ、無様な憂目に迄遭さるゝのか、同じ人の子なれば教育の仕様に依りては真人間と共に幸福の生涯を送らしめ得べきものを、後日罪を免さるゝ暁には蹶然不具者の伴となつて其教育に身を献げんと堅く心に決した。

太四郎は出獄して六カ月後の明治六（一八七三）年一月二十日付で待賢校に権教師として復籍した。彼は直ちに聾啞児教育にとりかかるが、この時同じ待賢学区区長であり、砂糖問屋を営んでいた熊谷伝兵衛もかの聾啞児について教育の必要性を訴えてきた。ここに熊谷の資金的援助も含めて太四郎の本格的な努力が始まり、待賢校内に瘖啞教場が誕生するのである。その最初の生徒が虐めにあつていた傘屋の子山口いと・善四郎の姉弟と魚屋の子山川為吉であった。彼らはわが国最初の聾啞生徒だとされている。

熊谷が書取りをして文字を教え、太四郎が発音と手話を教える形で

始めた独創的な教育は、一年後にいと等が早くもごく簡単な名詞の書取り、指導が容易な母音の発音も可能となつて、明治八（一八七五）年には一般教育課程の七級に進み、府庁より褒賞を受けたことが『東京日日新聞』にも報じられた。翌明治九（一八七六）年にも知事の褒賞を受け、そうした成果が明治十（一八七七）年の天覧授業へとつながった。

この年六月二十八日、西南の役で京都に滞在していた明治天皇は初音校と尚徳校で、それぞれ上京、下京から選抜された小学生の授業を見学した。「啞生別課」として参加していた山口善四郎と山川為吉に対し、教師太四郎は「愛生」と板書し、二人に発音させた。二人の回答に感動した天皇は金子を贈つたという。太四郎の試みはここに大きな実績を認められたといつてよいだろう。

この天覧授業の十五日前に、すでに文部省大書記官九鬼隆一がやはり善四郎と為吉の習字に感銘し、太四郎にその教育方法を書きまとめて提出するように命じた。そうして成つたのが『京都府下大黒町待賢校啞生教授手順概略』（以下、『手順概略』）というもので、これは明治十一（一八七八）年三月の『教育雑誌』第六十四号の付録として文部省から発行された。この『手順概略』は七四頁にわたる大著で、これがわが国初の障害児教育書となった。

この影響で太四郎のもとに入学希望が多数寄せられ、独立盲啞院の開設運動が高まり、多額の献金を見たこともあって太四郎の申し出に京都府知事榎村正直も府立校として認可するに至るのである。

日本初の盲啞院開学

日本初の盲啞院が仮盲啞院ながら開学するのは明治十一（一八七八）年五月二十四日のことで、開業式の模様を『大坂日報』が報じている。その内容は記者による一〇〇〇字近い長文で、その模様を忠実に描写している。当日は午前八時から雨が降り始め、式典開始予定の九時を過ぎてはやまなかった。十一時まで待つたが雨はさらに強くなったため、式典は挙行された。市中の老若男女が多数集まつており、神官、僧侶、教生、諸官員、総区長、各区戸長が着座すると京都府榎村知事を筆頭に祝辞が続いた。

劇的であつたのは、祝辞のあとであつた。記事を引用すると、

……終つて盲生徒伴井縁（十年六ヶ月）坐に立て小学読本一の巻を講じ、末にわたしの如き盲人にても怠りなく勉強すれば云々と演説したれば、着坐の方々涙を流さざるなく、知事君にも愛憐の情を発し玉い、手拭にて顔を拭われし状は拙き筆には尽しがたく、啞生山川為次郎（十二年五ヶ月）、同山口善四郎（十二年四ヶ月）の兩人立上り、教員古川太四郎君塗板に白墨を以て（動物ノ中何故二人ヲ貴シトスルヤ）と書き問えば、山口善四郎手勢にて答ふ（人ハ万物ノ靈トテ体軀ノ結構、精神ノ感覺等他物ニ卓越スルガ故ナリ）、又山川為次郎も手勢にて答ふ。（人間ノ智慧ハ何ニヨリ増長スルヤ）。（必学ナリ）山口答ふ。（然レバ言語ヲナス能ザルモノモ教育ヲ受ケレバ智力ヲ発達シ、万物ニ耻スルナキモノナリ。故ニ開業アル本月本日ハ我等ノ大幸福ト云

こうしたやりとりのあと、太四郎が再び塗板に「発音」と書き、「祝」の字を示すと、山口、山川の二少年がそれぞれ「イハウ(祝う)」「イハイ(祝い)」と書き、そろって発音したため、人々は驚き、感動したという。

京都盲啞院での経緯と大阪盲啞院まで

このように太四郎は日本の盲聾教育に大きな足跡を残し始めるのであるが、彼の精緻な盲啞教育の理論と手法を紹介するには障害児教育の専門分野に踏み入ることになるので、以下、幸之助との接点に絞って、以降の事実関係をまず整理しておこう。

京都盲啞院は仮盲啞院、仮校舎として発足したが、本格的盲啞院は明治十五(一八八二)年に上棟、長らく監事として責任者であった太四郎は、晴れて盲啞院院長となった。そして一般教育課程に加えて職業教育についても充実を図っていく。そして太四郎自身栄誉を重ねていく。明治十七(一八八四)年にはロンドン衛生教育博覧会から金牌を贈られ、翌十八(一八八五)年にはアメリカのルイジアナ州博覧会より賞状を受けたとある。⁽²⁴⁾ ここまでは順調であったが、明治二十二(一八八九)年にあたって、唐突な形で免職に至るのである。太四郎の人生二度目の奇禍ともいえる。

その子細は太四郎の金銭問題であった。盲啞院は明治十四(一八八二)年時点から財政的に問題を抱えるようになっていた。府立であり

ながら寄付金に頼っていたものが、時の大蔵卿松方正義のデフレ政策によって、寄付金が減少、その一方で本格的な学校運営が始まって、経常費が倍増し、破綻の兆候が表れてきたのである。その事態に院長として太四郎が私的な借用をすることで対応していたものが、逆にそのことで引責解任の動きが出たのである。

太四郎は下野すると上京区粟田口にある吉水園で隠棲する。吉水園とは東山三条の種油商西村仁作が園主となって地主たちと貸席業を営んでいた邸宅で、西村と地縁があつた太四郎は支配人か番頭を委嘱されたようで、ここに居住することになる。⁽²⁵⁾ その地で年少時から芸術家との交流も豊富であつたこともあつて、太四郎は書画等美術品の鑑定をして自適の生活をしていたようである。隠棲中に際立った出来事といえば、電話の発明者であり聾啞教育者のグラハム・ベルが明治三十一(一八九八)年に来日した時のことである。このことは『古川氏盲啞教育法』⁽²⁶⁾「序」によれば以下のようなことであつた。

明治三十一年十月米国の聾啞教育大家ドクトル、アレキサンダー、グラハム、ベル来朝し、先生を京都盲啞院に訪ふ、先生既に在らず、ドクトル、ベル頻りに先生に遭はんことを求め、人をして其意を先生の寓居に通ぜしむ、先生馳せてドクトル、ベルに会す、相見て互に喜び相抱く、ドクトル、ベル、先生の起居を問ふ、先生答へて曰く、久しく閑雲野鶴を友とすと、ドクトル、ベル之を聞き嘆じて曰く、嗚呼斯の如き人何故に世人は之を顧みざるか、我米國ならしめば相当の待遇を与ふるものと、更に語を改めて曰く、尊敬する古

川君我米国に來遊せよ、國賓を以て迎へんと、先生乃ちドクトル、ベルの厚意を謝して相別る（文中の先生とは太四郎のこと、傍線は原文ママ、漢字は新字に変更、判読のため筆者が読点を加えている）

世界的著名人であつたベルが世界講演旅行中に來日し、その動向が新聞紙上で伝えられていたが、院長を辞して九年を経てのこの一事は、やはり太四郎に大きな転機をもたらすことになつた。ベルとの会見は太四郎が盲啞教育の大家であることを社会に再認識させたのである。五代五兵衛はこの一事を知つて翌三十二（一八九九）年に太四郎の講演を聴こうとしたのであり、その結果私立大阪盲啞院の設立を決断し、京都盲啞院を辞して十年になる太四郎に院長就任を要請したわけである。その意味では、世界的發明家ベルがもたらした縁は、思わぬところで幸之助の周辺に及んでいたといえよう。

私立大阪盲啞院は五代五兵衛の社会事業であつたが、幸之助の父政楠にとっては人生の再起、太四郎にとつても聾啞教育家としての再生の場でもあつたわけである。

私立大阪盲啞院の顛末と太四郎の死

京都盲啞院時代と比べると大阪における太四郎は幾分恵まれていたと考えられる。京都時代は教育法の開発と院の経営の両方に多大の労力を要したが、大阪では院主五代五兵衛の強いリーダーシップにより経営面での心配は少なく、かなり教育に精力を傾けることができたようである。

その結果、明治三十七（一九〇四）年十月、太四郎は藍綬褒章を下賜されるという榮譽を与えられる。太四郎の教育法が明治十（一八七七）年の天覽授業以来、二十七年ぶりに再び國家の認めるところとなつたわけである。

先述のように、大阪盲啞院も京都盲啞院同様、財政的に困難な運営を強いられた。太四郎が大阪盲啞院院長を打診された時点でも、その危惧は十分予想されたことであろう。それでいながら、五代五兵衛の要請に応じたのは、どのような要因があつたのであろうか。自分とは違つたタイプである社会起業家である五兵衛の熱意と、やはり盲啞教育に対する自分の意欲に素直に従つたからと見るのが妥当であろう。

私立大阪盲啞院の市への移管問題は、政楠の死によりさらに太四郎の負担となつたが、私立大阪盲啞院院長となつて六年目の明治三十九（一九〇六）年という年は、太四郎自身にとつて報いのあつた年でもあつた。

この年夏から、聾啞教育講演会、第一回全国聾啞教育大会が企画され、太四郎は發起人に名を連ねる等、主役的役割を果たすのである。さらに牧野伸顯文部大臣に面会、盲啞教育制度化の建議を実現、自ら聾啞運動を大きく認知させる仕事をするともに、第一回全国聾啞教育大会では創始者太四郎への謝恩の催しもあり、太四郎にとっては仕事と人生において最高の舞台が用意されていたことになる。九月末から十月初旬のこの東京出張こそその時であり、その見送りに政楠が出向いたのもそうした背景があつたのである。したがつて、政楠の死は盲啞院関係者にとつては太四郎の栄光とは対照的な一事と見えたこと



明治39年3月29日 私立大阪盲啞院第二回卒業生。最後列中央に古河太四郎、彼の前に五代五兵衛がいる。幸之助の父政楠が含まれている可能性は高い。政楠はちょうど半年後の9月29日に急死する。大阪市立聾学校所蔵

であろう。

明治四十（一九〇七）年三月三十一日、文部省は太四郎に「多年盲啞教育の發達に尽力し功績顕著」の賞として一五〇円を給与する。また四月三日には大阪府立博物館で太四郎の頌徳歌「古川の流」が発表された。この催事を前日の『大阪時事新報』は見出しに、「▼大阪盲啞院長古川太四郎氏の名譽 ▼文部大臣より功勞金を贈らる ▼盲啞教育以外の古川氏 ▼日本音楽に対する功勞者」と謳い、長文の記事を掲載している。音楽に対する功勞についての子細は、明治十三（一八八〇）年に欧米文化浸透の影響で邦楽が疎んぜられ、邦楽禁止令發布の動きが出た時、当時京都府盲啞院長であった太四郎は東京においてこの報を聞いて憤慨し、雅楽の名門の支援を得て中央政府関係者に訴えかけ、その發布を阻止したことによる。太四郎が父から邦楽の教養を得ていたことと、盲啞院における音曲授業、慈善音楽界のプロデュースの実績が広く認知されていたともいえる。

このような榮譽を受け、同年四月十八日について私立大阪盲啞院は大阪市に移管され、市立大阪盲啞学校が誕生する。地所と建物は五代五兵衛からの貸借とし、その他は無償譲渡で決着がついていた。五兵衛は学校経営から離れたが、太四郎は長年の経験と明治天皇から賞された過去もあって、引き続き校長を引き受けた。

太四郎は新任の教員養成に尽力したが、前年から心臓を病んでいた太四郎の体力はすでに相当消耗していたようである。八カ月後の明治四十（一九〇七）年十二月二十六日、享年六十二歳で逝去した。訃報は『大阪朝日新聞』で八〇〇字、『大阪毎日新聞』は六〇〇字もの長

文で太四郎の履歴とともに報じられている。

II 古河太四郎の教育観の特徴と幸之助への影響

独自の実践教育

以上、太四郎の社会的な活動は、五代五兵衛との出会い以前に京都で日の目を見て、さらに五兵衛、政楠との協力によって大阪で盲啞教育に大きな実績を残した。

では、太四郎が松下幸之助に与える影響とは何であったのだろうか。その考察のために、太四郎の創造した盲啞教育の方法論の一端を述べる。

重要なことは、太四郎がつくり上げた教育法は彼自ら発想するところの独創的なものであったということである。諸般の事情もあつて、太四郎は盲教育と聾教育を同時に発想しなければならない立場となつたが、そもそも盲教育と聾教育を同時進行的に開発するということが、世界的にも類がないことであつた。

聾教育については、太四郎は、先述のように獄中において盲聾教育を発起した折、当時聾啞者たちが自然に使用していた手話をまず学ぶところから始めた。³⁰ 手話、指文字を有効なものとして捉え、それを系統立てて規定していこうとした。その一方で、聾児が口を動かして意思を伝えようとする行為も認めて生かした。すなわち、手指動作を中心につくられた視覚言語いわゆる「手話法」と、話者の口の形で意思を読み取り、同時に自ら喋ることができるような発声訓練を行う

「口話法」を併用するものであつた。こうした手法は「同時法」と呼ばれるもので、³¹ 現在も主流である。ただ余談になるが、こうした発想も日本における障害児教育の歴史として順当に継承されたわけではなかつた。

先にグラハム・ベルとの交流を紹介したが、ベルは実は極端な口話法の主張者で、太四郎の業績を評価しながらも、手指を使用する手話法に対しては批判的であつた。岡本稻丸はその影響を次のように記している。

……古河とベルの邂逅は聾教育史上まさに最初の東西両文明の出会いであつた。ベルの接見懇望に、二十二年の実質論旨免職で以来義絶同様だつた盲啞院³²の門をくぐつた古河は、抱きかかえられたべルからアメリカ国賓招待の賛辞を受ける。しかしその半面で、世界の大発明家ベルが、古河はじめわが国聾教育の手指使用を厳しく批判し、聾で口話に堪能なマーベル夫人を同伴してその純粹口話法の主張を証したことは、わが国斯界、殊に父母を動揺させずにはいなかった。そしてそれはその後、古河の業績の評価に大きな影響をもたらし、古河没後、その方法論をも消滅させるにいたるのである。³³

今でこそ手話の利用は当然視されているものの、先覚者としての太四郎に対する評価は、西洋盲聾教育との葛藤の経緯から低いままだと岡本は主張している。

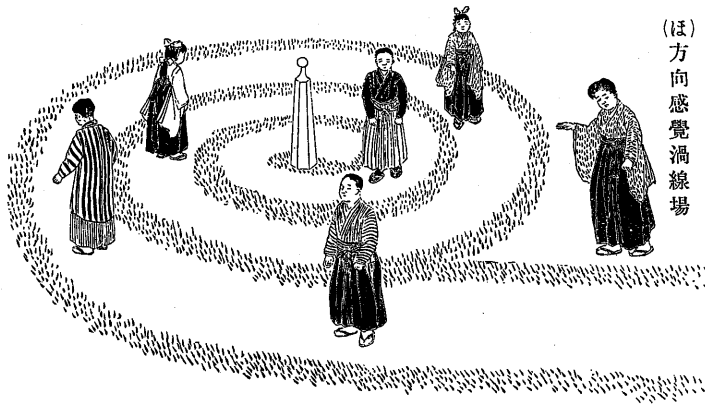
こうした教育論争とは別に、太四郎の盲教育、聾教育に共通して独

創的であったのは体育の重視である。体育の重要性について、太四郎は次のように記している。

普通児童が自然の天性に誘促せられ常に運動するが如きは知らず識らずの間に児童體育^{たいいく}上大なる利益を與^{あた}ふるなり然るに盲人は自然の誘促に従ふこと能はざるを以て一も活潑、活動と稱^{しょう}すべきものを見

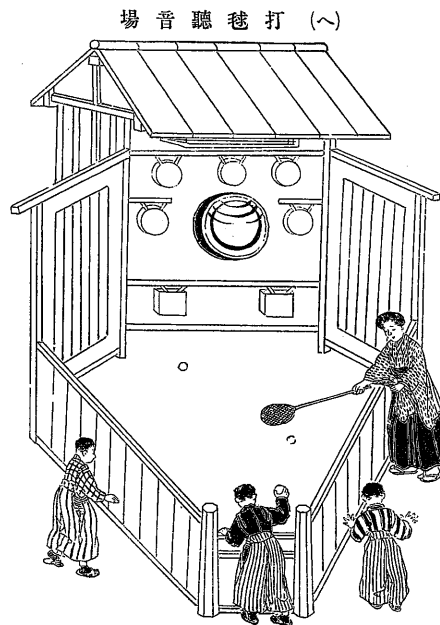
るを得ず此故^{このゆえ}に盲人に適當の遊戯を奨め體操を課して愉快に運動嬉戲せしむるは盲人體育上に最も必要なり^②

太四郎は遊戯的要素を加えてさまざまな訓練装置を開発した。図1はその一部である。太四郎はこの三つの装置「方向感覚渦線場」「打毬聴音場」「直行練習場」を京都盲啞院開学後わずか二十日足らずの



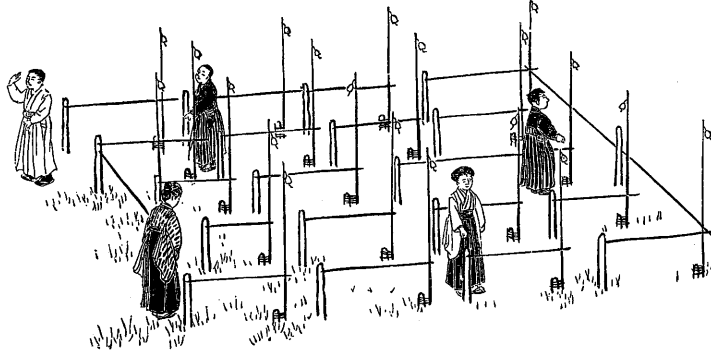
(ほ) 方向感覚渦線場

図1
上から「方向感覚渦線場」
「打毬聴音場」「直行練習場」
出典：『古川氏盲啞教育法』
京都府立盲学校創立百周年
記念事業委員会、1978年



場音聴毬打(へ)

場習練行直(に)



間に開発している。その他にも、「貫輪器」「打毬復國貫輪器」「単語
 図合」といった装置、「鬼遊び」「大将遊び」などの遊び、「盲生体操」
 という独自の体操を開発している。

とくにこれら装置の開発については、先行している欧米の手法を早
 急に取り入れる動きがあったものの、太四郎は人情風俗性格を異にし
 ているという観点からあまり積極的ではなく、すべて太四郎のオリジ
 ナルの発想によるものであった。京都盲啞院開学後、外国の文献やさ
 まざまな教具が盲啞院に送付されたというが、ほぼ太四郎の発明した
 器具器械に符合していたという。この点について太四郎は、「彼も人
 なり我も人なり。事物に接し懇切熱心に研究討尋せば其事物の上に現
 はるべき法則を知得し歸着を同うすることは當に然るべき所なり」と
 答えている。

このように太四郎は理論面においても実践面においても、京都盲啞
 院開学当時から、彼なりの強い思い入れと工夫によって独自に展開し
 ていた。

手話法、口話法といったカリキュラムにはふれることもなかったで
 あるが、音吉との使い番として、また父政楠との面会のためにたび
 たび訪問する少年幸之助に太四郎の教育観やその手法を知る可能性が
 あったのか興味深いところである。

太四郎の教育観①(人間観と東洋的ヒューマニズム)
 太四郎の教育観とはどのようなものであったのか。三つの特徴を述
 べておきたい。

太四郎は社会起業家、実践志向の教育家であり、自らの思想を系統
 立てて論じてはいない。したがって、史料に残る太四郎の言説を追う
 ことになるが、人間観として興味深いのは先述のように、明治十一
 (一八七八)年五月二十四日の京都盲啞院開業式で板書した、人間と
 動物との相違を認知させるところから障害児教育の意義を訴えるくだ
 りである。

太四郎が板上に、「動物ノ中何故二人ヲ貴シトスルヤ」と書き問え
 ば、山口善四郎は手話で「人ハ万物ノ靈トテ体軀ノ結構、精神ノ感覺
 等他物ニ卓越スルガ故ナリ」と答える。これは当然そういう演出を計
 画して行なったのであろう。なぜそういう演出を施したのか。おそら
 く、それは当時の世間における障害者への認識を訴え、障害者自身ま
 たその家族らに、同じ人間としての尊厳を改めて強調したかったから
 であろう。

明治二十九(一八九六)年に講演した折も、太四郎はやはり動物を
 引き合いに出して、人間としての行き方を強調している。

盲啞モ亦人ナリ、天、性命ヲ下ス。動物イヅレニヨリテモ然リ。
 飯令、不具ナリト雖モ、天、人トシテ性命ヲ与フル限りハ、必人ノ
 行ヒナクンバアラス。

岡本によれば「性命」とは「運命」と同義で、つまり運命として障
 害を負ったわけであるが、それでも人間としての運命を得たからには、
 人間としての行き方をしなければならぬと説いている。

明治三十九(一九〇六)年に「日本聾啞教育起因」と題する講演では、次のように説く。

凡そ人生の不幸は聾啞に如くものなし。啞に其身不憫なるのみならず動もすれば常人に凌辱嘲弄せられ、猶廢棄物として人類中に配せざる如き状あり、実に悲むべく憫むべきの極みと去ふべし。造物主何ぞ斯く偏するの甚しきやと独り嘆じて止まず。然りと雖も動物中最高なる人体を有する限は必ずしも人たるの行なくんばあらず、又為さしめざるべからず。

ここでも、動物の中で人間が最高であることを述べている。注目すべきところは、「造物主」という言葉を使用している点であり、単に人間と動物とを比較してのことではなく、造物主がつくった世界においてという意味合いが加わるようにもとれる。

岡本は欧米の啓発書の影響であるとしているが、この年は幸之助の父政楠が亡くなった年であり、先述のように太四郎が個人的には社会的に榮譽を得た時期である。この講演を幸之助が聴くはずもないが、身近な場である大阪盲啞院長が障害児への思いとつなげて強い人間肯定論を述べていたことは興味深い。

障害児教育に携わるに際して、こうした人間観が示されているのは、東洋的な人間観にあると岡本は説く。明治十一(一八七八)年三月の太四郎による『京都府下大黒町待賢校瘖啞生教授手順概略』の第一条には「啞人ヲ教フルノ要点ハ怨ノ一字」「満腔惻隱ノ心ヲ以テ教授

セズンバルベカラズ」とある。孔孟の東洋的ヒューマニズム「仁」がその源泉であり、岡本は自らの発心と実践の成果を古義学の師上田元冲と共に感し合つたにちがいないと想像する。

『古川氏盲啞教育法』でも第一編總論第二章で「盲啞教育は自然の愛に出づべし」とあり、その根本は孟子の「自然に出づる惻隱の心なり」と明言している。

太四郎の教育観2(「勢い」の哲学)

太四郎の教育観の大きな要素として二つめに挙げられるのは、東洋的な見方である「勢い」もしくは「勢」という概念である。

太四郎は、人間の行動は気の発動であると捉え、各部位から「勢い」(息生)が発散されて伝わると考えていた。先に太四郎は同時法を志向していたと述べたが、この原理からいえば、すべての身体器官による意思疎通を肯定していたともいえよう。これは何となく誰もが感じていることではある。『目は口ほどにものを言う』というが、それは「眼勢」が伝わっているということである。「勢い」は各感覚の回路を束ねる太い有機的な回路で、人間が自身を含む万物の意味を認識し伝達する全姿だといえるのである。①「手勢」②「手話」のほか、「体勢」「氣勢」「眼勢」「口勢」といった表現が、『古川氏盲啞教育法』にたびたび登場する。それも、盲聾児より教員に対する注意に頻出する。

一、教育の活法は懇の字より生じ教方の活機は眼勢に起ると此語は教員の常に服膺すべき格言なり②

一、教員の眼勢は成るべく教場の後部に注ぐを要す教授中理由あるにあらざれば、^④ 憑椅すべからず又教場に^⑤ 踞り身體の位置教場全部を一瞥し難きことあるは良しからず^⑥

岡本はこの太四郎の「勢い」を生理的、心理的、物理的エネルギー制御のようなものと説明しているが、オーラ、気のイメージに近いかもしれない。太四郎は当時の盲啞児の身体的、社会的境遇から個人間としての生命力が引き出されていないと考え、教員にもその氣勢を充実させ、言動すべてを通して生命力を伝導させることを求めたのであろう。気はまさしく人間の活力であり、太四郎はそのことを強く肯定しているわけである。

太四郎の教育観3（実学）

最後に挙げる教育観の特徴は、実学的であることである。このことは先に述べたように、あらゆる教育器械を現場で見聞した感覚をそのまま生かして発明したところから、太四郎の天性の資質といえなくもないがそれだけではない。

太四郎が出獄後、近代初等教育の教育者として受けた教育学の基本は実物教授法（教師が生徒に抽象的で、観念的な知識を一方的に注入する教授法）に対して、子ども自ら学ぼうとする自己活動に基礎をおく教授法を基本とするものであった。

実物教授法の源流はオランダの教育思想家ペスタロッチである。^⑦ ペスタロッチの思想は、①教育には家庭の温かさが必要である、②「メ

トード（直観教授）」の重要性を説くという二つの特徴があった。^⑧ 「メトード」とは、知識を言葉によって教えるのではなく、感覚器官を通じて教えていくというものである。まず感覚を鍛えて自立を促し、より理性を高める。これは、太四郎の「勢い」の哲学にも共有されるどころがある。ペスタロッチは貧しい子どもたちを集めて、農作業、機織りといった職業的技能和学校教育を両立、実践したというが、太四郎が手探りで開発した近代盲聾教育法もまさにペスタロッチ的であった。

以上のような要件をまとめてみると、ニワトリが先か卵が先かではないが、太四郎の素質や気質とともに、彼が嗜んだ東洋的、漢学的教養、そこに西洋の知識がうまく融合されて、太四郎の教育観が完成されたといつてよいだろう。

太四郎の幸之助への影響

ここまで太四郎の人となりとその業績、教育観に至るまでを述べてきたが、彼の幸之助に対する影響について整理しておきたい。

まず、幸之助が自らの証言の中で太四郎について述べていない以上、人間関係と呼べるものの成立自体証明できない。その点、幸之助自身が大きな影響を受けた、^⑨ と明言している五代五兵衛と比較するとその直接的な影響はあまり期待できないかもしれない。

ただ、先述したように、父政楠や五兵衛、あるいは音吉との関係の深さからすれば、当時知己ではなかったもしくははまったく知らなかったとは考えられない。

日本における盲啞教育の第一人者として、何らか人物像を父や五兵衛から聞かされ、面識はあったのではないか、また大阪盲啞院内で太四郎の教育観や訓練を少しなりとも見聞していたのではないかと想像すれば、幸之助の心中で、太四郎の存在はそれなりに意識されていたことも予想される。

いずれにせよ幸之助の修業時代に、五代五兵衛とはまったく違う社会起業家として、太四郎が近くに存在していた意義は大きいのではないだろうか。ことに重要なのは、太四郎の「人間尊重」の考え方である。幸之助の場合は、「人間は万物の王者である」という人間観を持っている。^⑧

人間には、この宇宙の動きに順応しつつ万物を支配する力が、その本性として与えられている。人間は、たえず生成発展する宇宙に君臨し、宇宙にひそむ偉大なる力を開発し、万物に与えられたるそれぞれの本質を見出しながら、これを生かし活用することによって、物心一如の眞の繁栄を生み出すことができるのである。^⑨

これは単に人間は動物よりも優れているというのではなく、宇宙の中における人間の地位、役割を論じている点で特徴がある。この点、太四郎の人間観は「人間優位」を論じてはいても、幸之助の「人間王者論」に近いことを述べているわけではない。

ただ、注目すべきは、太四郎は盲啞教育に取り組み始め、障害児や社会への啓発のために、人間が万物の霊長たる偉大な存在であるとい

うことを、強く主張していたということである。先述のように、京都盲啞院開学の式典で、塗板に「動物ノ中何故二人ヲ貴シトスルヤ」と書き、子どもに、「人ハ万物ノ靈トテ体軀ノ結構、精神ノ感覺等他物ニ卓越スルガ故ナリ」と手勢（手話）によって答えさせる演出を施したのは、その信念の表れであろう。宇宙観との関わりはともかくとして、幸之助が後年、人間とはどういう存在かという哲学的命題を最初に思索した折、影響を受けたのは何だったのである。太四郎の障害児教育との関わりの中で潜在的にでも、人間の偉大さを認識したという可能性も否定できないのではないだろうか。

また、幸之助のビジネス観を考える上でも、太四郎の教育観は近似する。たとえば、「勢い」の哲学である。幸之助がビジネスの現場において重視していたのは「熱意」である。「人生心得帖」で幸之助は、「口がきけない人であつても、熱意と誠意に強いものがあれば、きつと筆談をするとか、身ぶり手ぶりをまじえるとか、いろいろとくふうして、事をなしていこうとするでしょう。またそうした態度が人の心を打ち、共感を呼んで、必ず協力者が現われてくる。物事とはそのようにして成つていくものではないでしょうか」と書いている。すなわち幸之助の「熱意」の意義は、好きなことを熱心にやるということではなく、目的に対する忠実な努力の貴さである。太四郎の求めたものもこうしたものであろう。

その他、実学重視であるところや、経験に基づく直観の重視なども幸之助のビジネス観に近いところがある。「カンと科学は車の両輪」と自身述べているように、経験によるカンの評価は幸之助の一つの見

解だったといえる。ただ、幸之助のカン重視の原点を、太四郎や太四郎を経由したベスタロッチの直観主義に関連づけて論じる必要はないであろう。

本稿では、太四郎の人物像とその存在とは幸之助少年期の人格的成長を検討する場合、唯一、東洋西洋両方の知識に通じた有識者として、その影響を考慮するに足る存在であることを指摘しておきたい。

Ⅲ 五代自転車商会と私立大阪盲啞院

自転車店奉職まで

以上、古河太四郎の人物像と教育観を松下幸之助のレファレント・パースンの一人として検討してきた。最後に、前号で検討した盲啞院院主五代五兵衛の存在と併せて、私立大阪盲啞院という場所が当時の幸之助にとってどういう場であったのかを検討しておきたい。

前号で紹介したが、五代五兵衛が私立大阪盲啞院を設立したのは、明治三十三（一九〇〇）年九月十三日のことで、場所は大阪の北御堂南向いの本町四丁目浄久寺本堂である。

この時幸之助はまだ和歌山にいて満五歳である。実はこの前年に父政楠が米相場で失敗し、松下一家は住み慣れた海草郡和佐村から和歌山市本町一丁目に移居している。松下家の変転を少し辿っておくと、明治三十四（一九〇一）年に幸之助は和歌山市内の雄尋常小学校に入学する。この年は一家にとっては大過の年で、四月に八人きょうだいの三番目、次姉の房枝が二十歳で病没、続いて八月には長兄の伊三郎

がやはり病で二十三歳の若さで没する^②。幸之助は一家の不幸はもちろん痛切に感じたであろうが、一応、小学生生活を続けた。

私立大阪盲啞院との関わりが生じるのは、翌明治三十五（一九〇二）年、父政楠が単身大阪に移住し、同院に奉職するところからである。和歌山市内で営んでいた履物商がうまくいかず、出稼ぎをせざるをえなくなつたわけだが、政楠が盲啞院にどのような縁故によって奉職できるようになったのかは、わかつていない。盲啞院との話があつたから大阪へ出たのか、大阪へ出てきてから出稼ぎ口として職を得たのかも不明である。そして、その翌々年の明治三十七（一九〇四）年に幸之助は満十歳を迎える直前に、父から呼び寄せられ、小学校を四年で中退、大阪に出てくることになる。大阪八幡筋にあつた宮田火鉢店に三カ月勤め、その後、火鉢店が事情により店じまいをすることになり、ちよつど開業する五代自転車商会に移ることとなつた。

少し疑問が残るのは店を移る経緯で、幸之助自身によれば、火鉢店の主人が自転車商会の主人五代音吉と知り合ひであり、話がまとまつたという^③。しかし、考えてみればすでに父政楠は盲啞院に奉職しているわけであり、音吉の兄の五兵衛も資本の提供者として事情を知つていたはずである。火鉢店の主人も父政楠にまず相談したことであるうし、おそらく五兵衛や音吉の了解が先にあつたのではないかと思われる。

盲啞院の思い出

それはさておき、当時の奉公生活というものを考えると、幸之助の

仕事は正月と天長節、夏祭を除くぐらいでは半年中無休であった。店外に出るにしても仕事の関係ばかりであったはずである。そうした中で、仕事以外で唯一立ち寄れる場所が私立大阪盲啞院であったと考えられる。五兵衛と音吉とのお使い係として立ち寄る。あるいはまた配達のついでで近くに来た場合でも、何より父の顔を見に来るといったことが当時の幸之助の大きな救いであったのではないだろうか。

幸之助は盲啞院での思い出を『私の行き方考え方——わが半生の記録』で披露している。

こうして小僧生活をして商売の道を見習っている私の姿を、父はどんなに期待していたであろう。私は子供の時分、腸が少し悪かったためであろうか、びろうな話だが、よく大便をしくじったものである。ある時も自転車で乗って使いに行つて帰る途中、腹がシクシク痛みだすと同時に大便を催してきてもうどうしても辛抱できず、とうとう自転車に乗りながら下してしまつた。ところが先にも話したとおり、自転車にまともに乗つておらなくて横手から中立ちであるから、かえつてよけいに催すようなかげんになつていたので、自転車を糞だらけにして、きたないやら情ないやら、始末することもようせず、泣き泣きそのままの姿で父のいる盲啞学校に走り込んで、父にそれを話して泣きだした。父はその姿を一目見てビックリして、どうしたのかどうしたのかと声を立て立て、それでもいたわつて、その始末をよくしてくれした。この時のことを、今でも思い出して父の愛の深さにしみじみ打たれるのである。

父政楠は先祖代々の家産を失つたことに對する罪悪感を相当持つていたようで、唯一残つた男児である幸之助に強い期待を抱いていた。したがつて、幸之助の不始末や苦勞に對して理解しつづ、「出世しなければならん。昔から偉くなつてゐる人は、皆小さい時から他人の家に奉公したり、苦勞して立派になつてゐるのだから、決してつらく思はずよく辛抱せよ」という言葉を口癖にしていたという。

父に下の世話をさせる息子の申し訳なさと、家産を失つた父の息子への申し訳なさが交錯することからしても、盲啞院という場の役割は、まず親子の情を感じられる場所であるとともに、将来の家の復活を確かめ合う場であつたことであろう。

そして、その一方で、盲啞院は障害を持ちながら稀有の成功者となつた五代五兵衛と、獄中生活も体験した異色の創造性豊かな教育家太四郎の薫陶を受けることが可能な場所でもあつた。

父との對話の中で、五兵衛とともに太四郎がどのような人物であると聞かされたのか、また幸之助がじかに五兵衛と會話をする中で、何を学んだのか。太四郎と言葉を交わしたことがあつたのか。少年幸之助は盲啞院の生徒たちに對してどのような思いを抱いていたのか。

余談であるが、幸之助は後年多くの公職に就いたが、福祉関係についてはいないと思われていた。しかし、『大阪市聾学校六十五年史』には、昭和二十四（一九四九）年九月十三日の項に、大阪聾啞者福祉協会発会式が挙行され、幸之助が会長として就任したと記されている。この事実は、松下電器（現・パナソニック）の社史史料でも銘記され

ていないこと。また当時の幸之助が戦時における活動を問われて、G H Q（連合国軍最高司令官総司令部）から制限会社・財閥家族・賠償工場・持株会社の四つの指定を受けたまま、経営活動に支障を来していた時期であること。そして現時点で継承団体もなく活動実態が不明なことも含めて、その意義を評価するのはむずかしい。

しかし、大阪盲啞院という場所が幸之助と福祉との最初の接点であったことは明白であり、少年期の人間の成長に何らかの影響を受けた場として検討する意義があることを指摘しておきたい。

おわりに——レファレント・グループからの旅立ち

遠ざかる盲啞院

筆者は冒頭、松下幸之助のレファレント・グループとして五代五兵衛と音吉の兄弟、幸之助の父政楠、古河太四郎を挙げたが、前号においては五代五兵衛の影響を、本稿においては太四郎の人となりとその影響を検討した。

このレファレント・グループの影響は、幸之助の明治三十七（一九〇四）年の秋から明治四十三（一九一〇）年の初夏までおよそ六年に及ぶ奉公時代だけに関わる。

その間、私立大阪盲啞院と五代自転車商会の立地も変化していた。最後にそれらの位置関係と、同時代の大阪市内の変化を確認しながら、幸之助が奉公生活からの決別と、電気の世界に身を投じる決断をした背景を検討しておきたい。

大阪盲啞院の変遷は以下のとおりである。

- A 南区大宝寺町中町誓得寺（明治三十三年二月十一日 創立事務所）
- B 東区本町四丁目浄久寺内（明治三十三年七月一日 開業跡地）
- C 南区塩町一丁目一六番地（明治三十三年十一月三十日 塩町校舎）
- D 南区長堀橋筋一丁目（明治四十二年七月五日 長堀校舎）

また、五代自転車商会は、明治三十八（一九〇五）年二月、XⅡ東区淡路町二丁目に開業したが、商売が振るって店の拡張に迫られ、四月にはYⅡ内久宝寺四丁目に移っており、幸之助はこの六年間弱をここで過ごしていたと思われる。なお、五代五兵衛宅は東区和泉町二丁目、古河太四郎宅は南区北桃谷三丁目三番地^⑤にあった。

こうした地理関係を図2に見ながら、幸之助の奉公時代を追っていくと興味深いものがある。幸之助が大阪に着いた頃は、大阪盲啞院は塩町ⅡCに位置し、宮田火鉢店はその南西五、六〇〇メートルと離れていた。それから三ヵ月後、今度は北東の五代自転車商会に移り、そしてまた二ヵ月後、内久宝寺四丁目到店舗が移動したということになる。ただでさえ不安が募るところに、引越し続きで少年幸之助は落ち着く間もなかったと考えられる。

しかし、新しい店舗ⅡYは、父が奉職している盲啞院ⅡCとは、東掘川をはさんでせいぜい三〇〇メートルの近さにあった。しかも、町名こそ違うが、和泉町と内久宝寺は隣接していて五兵衛の邸宅は五代自転車商会の裏にあるようなものであった。幸之助の店は盲啞院と五

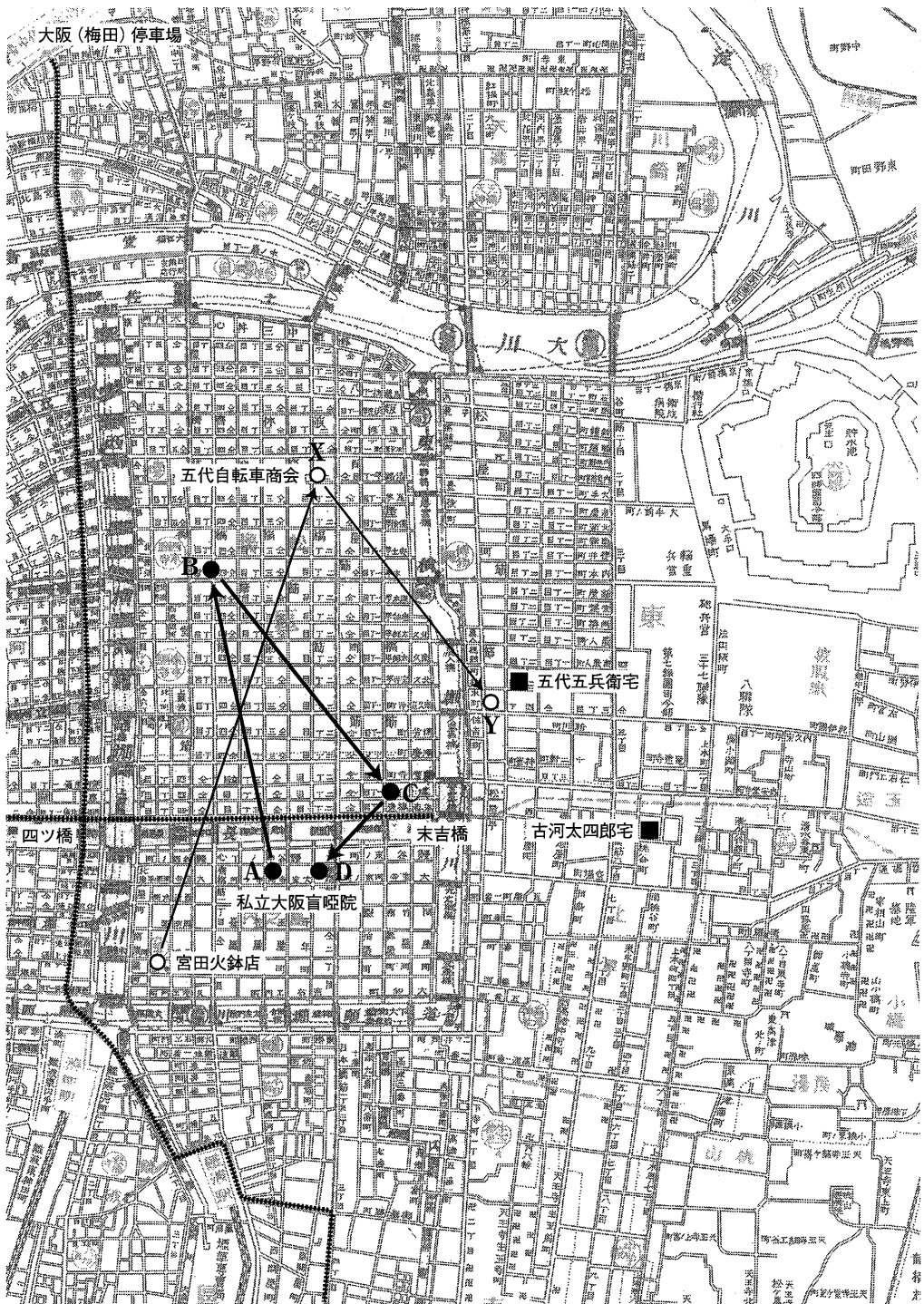


図2 私立大阪盲啞院と幸之助の奉公先の移転
 『実地踏測 大阪市街全図』(和楽路屋書店、明治41[1908]年)に筆者加筆

- 幸之助の奉公先の移転
- 私立大阪盲啞院の移転
- 明治41[1908]年第二期線として開通した市電

兵衛宅の間にあり、幸之助が五兵衛の送り迎えに遣わされたというのは得心できるし、便をもらして店に帰る前に父のいる盲啞院に寄ったという先のエピソードもイメージできる。

その意味では、厳しい奉公生活とはいえず、父の存在を思った以上に身近に感じていたのではないだろうか。しかし、奉公を始めて二年後、明治三十九（一九〇六）年九月に父政楠が急逝、翌四十（一九〇七）年四月には盲啞院が私立から市立に移管してしまう。五兵衛との関係が薄まった上、父が仕えた太四郎もその年末に病死する。さらに盲啞院はその二年後の明治四十二年（一九〇九）年に長堀橋方面に遠ざかり、ますます縁遠くなっていく。このように一、二年足らずの間の立地的な変化は、幸之助の心理的にもかなり盲啞院を遠くにしてしまったのではないかと推察される。

転業の一つの背景

ところが、盲啞院の代わりに幸之助に身近になってきたものがあつた。それが大阪市内に広がる市電網であつた。

大阪の市電が開通したのは明治三十六（一九〇三）年のことである。しかし、開通したといつても、区間は築港（現在の大阪天保山付近）―花園橋（現在の九条新道交差点）間のみであつた。したがって、開通当時、幸之助が頻繁に眼にすることはなかつたであろう。

ところが、明治四十一（一九〇八）年七月までに、第二期工事の結果、市電は九条、四ツ橋を越えて、図2のように盲啞院のすぐ南の末吉橋にまで伸び、四ツ橋を基点に梅田―恵比須町間の南北方向にも

及んで、誰の眼にも新時代の幕開けを告げる存在となつたのである。

幸之助が自転車小売業から電気事業への転身を決断する背景には、考慮すべき点が多く残されているが、本稿で述べてきたように、レフアレント・パーソンとの場であつた私立大阪盲啞院との疎遠が、幸之助の商人としての成長と独立心の高揚とともに、時機的にも背中を後押しした可能性が指摘できるのではないだろうか。

次号は、松下幸之助が商人としての躰を受け、真の修業の場であつた五代自転車商会の実態と重要なレフアレント・パーソンの一人五代音吉について考察していきたい。

【注】

(1) 浜口恵俊『日本人にとってキャリアとは——人脈のなかの履歴』日本経済新聞社、一九七九年、二頁。浜口は本書でその人物が得た人脈により人生観が育まれ、人生の針路も決定されたと主張している。

(2) 太四郎以外の人物を考慮すると、おそらく父政楠が太四郎に次ぐ知識と教養を有していたのではないだろうか。五代五兵衛、音吉兄弟は播磨屋という商家の出であり、寺子屋教育の域を出なかつた可能性がある。昭和十二（一九三七）年和佐尋常高等小学校刊行『和佐村誌』によれば政楠は和歌山時代、明治二十二（一八八九）年では海草郡和佐村の村会議員を務め、相場にも通じていた。また盲啞院では五兵衛の秘書業に加え、書記、会計を兼ねていたことから窺える。

(3) 福島彦次郎編『五代五兵衛翁頌徳誌』五代五兵衛翁頌徳会、一九三七年によれば、玉造方面に家を構えていたが、当時は和泉町二丁目に移したとある。

- (4) 渡邊祐介「社会起業家・五代五兵衛と私立大阪盲啞院——松下幸之助のレファレント・パーソンとして」『論叢松下幸之助』第一〇号、P H P総合研究所、二〇〇八年、七八頁。
- (5) 岡本稻丸『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』日本放送出版協会、一九九七年、四六四頁。
- (6) 同前、四六三頁。
- (7) 同前、四六三頁。
- (8) この時期の太四郎は「古川」としていた。
- (9) 同前、四六四頁。
- (10) 同前四七八頁によると、見送りに肉親の他、大阪盲啞院の教頭目黒文十郎、書記松下政楠等四名他一人とある。
- (11) 同前、四六四頁。
- (12) 太四郎は明治四十(一九〇七)年八月二十五日発行『教育時論』の教育功労者を紹介する「聖代の瑞祥」にこう記した(同前、七頁)。
- (13) 同前、二二頁。
- (14) 上京第二十七番組小学校が明治二(一八六九)年に開校している。学制発布後も京都においては寺子屋人気が強く、小学校への移行は容易ではなかった。そうした中で太四郎の兄亮朝が自ら塾の門を閉じたことは美談であった、と岡本は前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』三四頁に説明している。
- (15) 小西は太四郎死去を報じた新聞「日本」の追悼談に「直話」として紹介している。前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』二二—二四頁。
- (16) 同前、四五頁。
- (17) 盲聾教育の発起者は実は上京第十九区長であった熊谷の主導だったという説も明治三十六(一九〇三)年刊『創立貳拾五年記念京都市立盲啞院一覽』にあり、ここでは熊谷の提案を太四郎が同僚の佐久間丑雄とともに引き受けたとある。
- (18) (19) 山口いとは家庭人となり、弟の善四郎と山川為吉は金工を学び、鳥津製作所の模範工となる。善四郎は将棋三段に達したという記録が昭和十五(一九四〇)年刊の伊藤薺園『日本聾啞秘史 言はぬ花』(教育研究会)にある。
- (20) 前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』第五章「京都府盲啞院、開学への道」参照。
- (21) 正しくは半井縁。宮司の子で初の盲児であった。太四郎に「聾児が教えられるなら盲児も」と頼み込んだという。
- (22) この当時「手話」という表現はなく、手真似、仕方などと呼ばれたが、太四郎はその人の持つ気を重んじ、あらゆる姿勢から「勢い」が出るとして、手指による表現を手勢と呼んだ。記事はおそらく太四郎の考え方を踏襲したものと思われる。
- (23) 前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』二頁。
- (24) 『古川氏盲啞教育法』(大正二年文部省発行の復刻版)京都府立盲学校創立百周年記念事業委員会、一九七八年、「小傳」二頁。
- (25) 前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』三六二頁。この敷地が明治三十三(一九〇〇)年以降、都ホテル(二〇〇二年よりウエスティン都ホテル京都)となっている。
- (26) ヘレン・ケラーに家庭教師アン・サリヴァンを紹介するのはベルである。
- (27) 前掲『古川氏盲啞教育法』四—五頁。
- (28) 同時に私立大阪盲啞院にも「盲啞教育に関し務めて諸般の施設をなし実績観るべきものあり」ということで一〇〇円が給与されている。
- (29) 前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』六二七頁。
- (30) 岡本稻丸「古河太四郎の言語教育観と方法論」『ろう教育科学』四〇(四)、ろう教育科学会、三三三頁。

- (31) 聾教育の歴史においては、大正期、欧米における手話を嚴禁とする口話法導入が主流となった時期があり、その一事によって太四郎の功績が過小となっている、というのが岡本の主張である。
もちろん京都盲啞院のことを指す。
- (32) 前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』六五四頁。
- (33) 前掲『古川氏盲啞教育法』第三編 盲啞教育の方法』二七頁。
- (34) 前掲『古川氏盲啞教育法』「序」三頁。
- (35) 現大阪市立聾学校長・吉田敏朗氏によると、太四郎考案のさまざまな器械は京都盲啞院時代に限られたもので、大阪の盲啞院でも設置された可能性は低いのではないかと考えられるという。
- (36) 明治二十九（一八九六）年頃の講演における草稿。前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』四五頁。
- (37) 前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』四六頁。原典は青山武一郎編『聾啞教育講演会・第一回全国聾啞大会・日本聾啞技芸会五二会出品 報告』日本聾啞技芸会、一九〇七年
- (38) 前掲『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』六四二頁。
- (39) 前掲『古川氏盲啞教育法』「第一編 總論」三頁。
- (40) 岡本福丸『京都市内盲啞院史跡の案内と古河太四郎先生の実像』『ろう教育科学』四三（四）、ろう教育科学会、二〇〇二年、三二頁。
- (41) 前掲『古川氏盲啞教育法』「第一編 總論」六頁。
- (42) 同前、七頁。
- (43) 前掲『京都市内盲啞院史跡の案内と古河太四郎先生の実像』三二頁。当時文部省は教育課程も教科書もアメリカのペスタロッチ主義を活用する方針を採っていた。前掲『京都市内盲啞院史跡の案内と古河太四郎先生の実像』三三頁。
- (44) 方法論とは違うが、ルソーのような中流階級以上の子弟教育では

- なく、広く民衆の教育を考えたことが評価されて「民衆教育の父」と称えられている。
- (47) 松下幸之助『折々の記——人生で出会った人たち』P H P 研究所、一九八三年、二二—二五頁。
- (48) 幸之助の人間観が明確に示されたのは、昭和四十七（一九七二）年『人間を考える——新しい人間観の提唱』（P H P 研究所）においてである。
- (49) 同前、八一—九頁。
- (50) 松下幸之助『人生心得帖』P H P 研究所、一九八四年、五五頁。
- (51) 松下幸之助『経営のコツこなりと気づいた価値は百万両』P H P 研究所、一九八〇年、四〇—四二頁。
- (52) 松下幸之助『私の行き方考え方——わが半生の記録』P H P 文庫、一九八六年、一六頁。この不幸について松下は、「ただささえ窮乏に迫っているところへかくのごとき状態であるから、父母は精神的にも、財政的にも、非常な打撃を受けたものである。当時の母の愚痴なり、その疲れた姿を思い出すとほんとうに気の毒にたえない」と記している。
- (53) 同前、二二頁。
- (54) 同前、二七頁。
- (55) 同前、二七—二八頁。
- (56) 大阪市立聾学校所蔵の太四郎自筆の履歴書による。

*古河太四郎ならびに盲聾教育については、大阪市立聾学校の吉田敏朗校長から数々のご教示を得た。厚く御礼申し上げます。

（わたなべ・ゆうすけ P H P 総合研究所経営理念研究本部松下理念研究部長）